

内田魯庵とA・ポーブ

——『文学者となる法』における構想の原点——

川戸道昭

内田魯庵の初期の作品に『文学者となる法』¹という戯作調の諷刺本がある。表向きは、文学者として成功する秘訣を教授するといった、今日でいうハウ・トゥーもののような体裁をとっているが、実際は「人気」の前に「叩頭百拝」する当時の流行作家の志の低さを、毒のこもった皮肉の口調で暴きたてた峻烈な諷刺の書である。この本のおもしろさは、そこに列挙されている「文学界の動靜を知る法」や「文学者の守るべき三か条」といった文学を志す者が身につけておくべき知識の一つ一つに、当時の流行作家の〈文界遊泳術〉の手法が実名入りで添えられていて、それが今日の週刊誌のゴシップ記事を読むような興味を煽りたてる点である。批評家によつては、これを尾崎紅葉らの硯友社に対する批判、戯作文学の否定を狙った作品と受け止める者もあるようだが、攻撃の対象になっているのは硯友社系の作家に限ったものではない。民友社、早稲田派、三籟派、文学界派、あるいは帝国大学教授、金銭目当ての雑文書き、はたまた博文館、春陽堂といった有力書店の店主に至るまで、明治二十六、七年当時、その方面で勢力を張っていた有力者誰一人としてその愚行を槍玉に挙げられていない者はない。これを目にするものはさながら当時の総合的な文壇諷刺絵を目にするような印象を強く心に受けるのである。

文壇における俗物の愚行を暴いた書ということ、わたしは以前からこの本を書く魯庵の念頭には、有名な英国の桂冠詩人アレクサンダー・ポーブの『ダンシアッド (The Dunces)』(一七二八年、四巻は一七四二年)があったのではないかと考えていたが、先ごろ坪内逍遙の『春酒家漫筆』(明治四年)の中に「ダンシヤッド」という小文を見つけ、それを読むうちに、やはり『文学者となる法』の成立にはこのポーブの著名な諷刺詩が深く関わっていたという確信をもった。逍遙の文章にしたがって、『ダンシアッド』が書かれるまでの経緯をたどってみると、概略次のようなものである。

《英の風刺詩の大家アレキサンドル、ポープの其名漸く著はれるころスキフトと図りて其以前にものせし小品の作の離れ々々に世に出てありけるを一冊に取集めて出版せんとて其付録に *Batos* と題する一篇を添えけり。「バソス」とは *Art of sinking in poetry* といふ義、即ち俗解すれば「詩の下手になる法」といふ意なり。此篇の一章に下手詩人の悪詩の見本夥多作りてさまざまに分類をし一ツくに a 又は b など二十六文字を一字宛書き添えて作者の名の代としけり……》

そのころは「下手になる法」に長じた詩人の数がおびただしかったとみえ、この篇が世に出るや、これはわが名の頭文字だ、これは自分の姓を暗に示したものだといって、腹を立てるものが後を絶たず、彼らは憤慨のあまり一斉に「バソス」の作者に対する悪口雑言を新聞雑誌に掲載し始めた。ポープとしても、一つには正当防衛のため、また一つにはこの悪詩人ばらを追い払って文苑の浄化をはかるため、新しい著作を手掛ける必要を感じた。己れの目的を遂行するためには、まず悪詩人どもの人となりや作品がいかにか卑しむべきものであるかを世に示す必要がある、とこのような考えから有名な『ダンシアッド』の執筆が開始されたのだという。『ダンシアッド』とは「馬鹿（ダンス）の *Iliad*」「イリアッド」の義にて小説体の詩なり。翻して『愚物語』ともいふべきか……愚物とは悪詩人等を指せるなり」と逍遙は説明を加えている。

この逍遙の説明文で注目されるのは、第一に、「バソス」なる作品に与えられた「詩の下手になる法」という邦題と、その中味が類型化された悪詩の見本であったということ、そして第二に、その作品がもたなって当時の文壇の浄化を目的とした『ダンシアッド』の執筆が企図されたという点である。

魯庵の『文学者となる法』もまた文壇の浄化を目的とし、その内容は当代の文学大家を各派別に分類列挙し、それに批判を加えた総合的文壇戯画である。ただ異なる点といえは、魯庵はポープのように己れの作品に「愚物語」や「へぼ文士になる法」といったストレートの題名を付すこととせず、そこに一ひねり加え、あたかもまともな文学指南の書であるかのような「文学者となる法」という標題を掲げたことである。しかし、

一方で、彼は、これが題名通りのハウ・ツーものではないということを読者に伝えるための、ある工夫をほどこしている。それは表紙絵の図柄の中にはつきり見て取ることができる。その絵は、中央の標題の上に鹿の頭部が描かれ、それを左右から囲む形で二頭の馬（あるいは驢馬）が跳ね回り、さらに裏表紙へと続いて、その後を二頭の鹿が追う、というもの。つまり、いわずと知れた馬鹿の譬えだ。

仮にその意味は挿みそこねても、表紙をめくって中扉の次に綴じ込まれている錦絵を見れば、作者の意図がいかなるところにあったか、これはもう疑問の余地もない。そこに描かれているのは、驢馬と鹿にまたがった古風な身なりの大群が「是より文学国」「骨あるもの入るべからず」と書かれた標識の前を通過していく姿である。大群の通過する傍らには「名物 骨ぬきだんご」という看板の掛かった茶店があり、その前で元禄小袖や黒羽二重を着た女性が盛んに客の呼び込みをしている。茶店の中には一人の遊治郎が床几に身を横たえ、甘美な西洋の暮らしの夢をまどろんでいる、というふうには、読者は本文に入る前からこれはもう文学指南の書物どころか、前途ある若者たちが墮落した文学世界に身を沈めることがないようにという願いの込められた警告の書であることが視覚的にわかる仕組みになっているのである。

この錦絵を見てわたしが前々から疑問に思っていたことは、群衆の乗っているのが馬と鹿ではなく驢馬と鹿であるということであった。公家や殿様のような身なりの男が驢馬にまたがるというのはどうも落ち着きが悪い。その背後にはなにか西洋起源の比喩が隠されているように思われるのだが、英語で驢馬を表す *ass* という語には馬鹿者という意味も含まれるから、あるいはその辺を狙ったことかと、漠然と作者の意図を推し量ってみたりしていたが、逍遙の「ダンシヤッド」を読むにいたってその意味が判然とした。なんのことはない、これも『ダンシヤッド』からの借りものだったのである。

『ダンシヤッド』は発売早々大変な売れ行きを示し、中には偽版を作る本屋まで現れた。偽版には表紙にふくろうの絵がついていたことから、元版の書肆はこれに対抗する意味で、新たに刷るものには驢馬を描いてこれに作家連中が大勢乗った表紙をつけたが、偽版の方も負けじとばかりふくろうを廃めて驢馬を描いたため、元版の書肆もまた表紙を改め今度はふくろうの絵に換えた、そうこうするうち元版、偽版、双方の業者が広告を出してお互いに相手を非難する中傷合戦とあいなり、しまいには、ふくろう印をもって正しいとする読者と驢馬印をもって正しいとする読者が現れ、議論は久しく決しなかつたという。

わたしはこの逍遙の記述を読んで、実際に『ダンシヤッド』の原本をいろいろ調べてみたが、逍遙のいうように、驢馬に「作者連大勢騎りたる」絵はどこにも見当たらなかった。一七二九年の四つ折り版の口絵には、なるほど驢馬の絵はあるにはあるが、その背に乗っているのは「作者連」ではなくて、多くの書物と新聞雑誌の類である。なにか妙だなど思っただけで資料を漁るうちに、逍遙の「ダンシヤッド」の原文が出てきた。彼の小文は、当時日本でも広く読まれていた『パーシー逸話集』という書物の「文学」の項にある「ダンシヤッド」という文章をそのまま翻訳したものであったのだ（おそらくその文章の出典は、一七三四年ポープが「愚物」たちと争いを続けている最中に出されたある本の「前書き」に拠るもので、それを書いたのはポープ自身であったと思われる）。

ただし逍遙の訳には重要なところで誤りが二箇所存在する。一箇所は驢馬の絵が描かれているのは表紙ではなく口絵である点、そしてもう一箇所は驢馬（複数ではなく二頭）の背に乗っているのは著者ではなくて愚物どもの著した著書であるという点である。後者は、author という語に「著者」「著書」の両義があることによる逍遙のうっかりミスだと思うが、『逸話集』には参考となるような挿し絵はなく、ただ文字で [an ass laden with authors] と書かれているだけなので、『ダンシヤッド』の口絵を目にしたことのない者は、逍遙でなくとも「著者」と解釈したくなるところである。

問題は魯庵の方だが、彼は逍遙の「ダンシヤッド」を読んでその口絵のヒントを得たのか、あるいは直接原文を見て学んだものか。驢馬に人が乗っているという点に限っていえば、逍遙の文を参照したとも取れるし、あるいは原文を参考にはしたが、逍遙と同じ間違いをしたとも、意図的に書物を人物に入れ替えたとも、いずれにも解釈することができる。しかし、逍遙の文を参照したにせよしなかったにせよ、『文学者となる法』を書く際の魯庵が『ダンシヤッド』の原典を参考にしていたのは疑いを容れぬ事実である。そのことを証明する確かな証拠は、例の錦絵の綴じ込まれた前の頁、つまり中扉に書かれた四行の英文である。そこに掲げられている英文は出典こそ明らかにされていないが、紛れもなく『ダンシヤッド』（第四巻）からの引用なのだ。

Lo! Those Obaka to

belles! let us fly!

In vain! They dip, turn

giddy, rave and die!

【参考訳】

見よ、あの大馬鹿どもは

文学に走る

愚かにも彼らはそれに浸って、頭をやられ、

うわ言をいいながら、死んでいく

ただし、これは原文をそのまま引用したものではない。「*Bellestettes* (文学)」と「*Obaka* (大馬鹿)」の文字は、魯庵が勝手に入れ替えたもので、しかも、「*Obaka*」の文字は英語を理解しない読者にも分かるようにローマ字表記の日本語がそのまま当てられている。表紙の絵といい、この詩文といい、あるいは口絵の錦絵といい、すべて要約すると結局は、「文学」と「大馬鹿」の二語に帰着する。開巻冒頭においてわれわれはこの二つの語を頭に焼き付けられた上で、本文に入っていくというわけだ。

『文学者となる法』を執筆する際の魯庵の頭の中には、ますます退廃に傾く現今の文壇をなんとかしなくてはならないという焦りにも似た強い使命感があった。この諷刺作品の前後に書かれた彼のすべての作品が、たとえば『ラセラス伝』の作者、『ジョンソン』というような海外の文豪を主題とした評論・評伝を含むすべてのものが、日本の作家の志の低さを戒め、真の文学の出現を願って書かれたものであった。「著者は十八世紀の腐敗を論じて暗に明治の今日を諷刺し、ジョンソンの行実を録して暗に明治の文士を戒ましめんとしたる跡歴々たり、随うて、此の伝論は正統の伝論といはんよりは、寧ろ史伝を材料として物したる時論とも評すべきもの也⁸⁾」。一見ありふれた評伝のように見える『ジョンソン』の中にいち早く魯庵の本当の狙いを看取った坪内逍遙の言葉である。

『文学者となる法』における魯庵の意図も、まさにこの「明治の今日を諷刺し」、「明治の文士を戒め」という一点に絞られる。ただ、本書においては、正論を振りかざして相手の非を正面から突くという方法をやめ、そこに多少のひねりを加えたということが唯一異なる点だ。彼は、当節文壇に勢力を張るありとあらゆる文士の愚行を列記し、その卑しむべき実態をえぐってみせた。そこに展開されているのは、毒気に満ちた文壇戯画である、しかもそれは単なる愚行の羅列にとどまらない、確とした考察と分析に基づき、立体的な文壇戯画である。その背後には、紛れもなく、英文学史上比類のない諷刺家アレグザンダー・ポープの「*Bassos*」と『*Dan Shiad*』という、文界の俗物の撃退とその浄化を目的とした二つの諷刺作品の存在が見え隠れしているのである。

注

- (1) 内田魯庵『文学者となる法』宮沢俊三発行、明治二十七年四月。
- (2) 坪内逍遙「ダンシヤッド」『小説春廬家漫筆』春陽堂、明治二十四年九月) 一〇〇〜一〇二頁。
- (3) 正式な英文タイトルは「Bathos, or the Art of Sinking in Poetry」。
- (4) 同口絵は以下の書物の巻頭に掲載されている。『The Works of Alexander Pope Vol. IV, with Intro. and Notes by W. Elwin and W. J. Courthope, Reprinted 1967, Gordian Press, New York』本書はリプリント版で原本は『春廬家漫筆』が出版される以前の二八八二(明治一五)年に刊行された。
- (5) 「The Dunciad」 in 『The Percy Anecdotes collected and edited by Reuben and Sholto Percy, Frederick Warne and Co., no date. Vol. I, p. 576.』
- (6) 前掲『The Works of Alexander Pope Vol. IV』に付られた「Introduction to the Dunciad」参照。
- (7) 『ダンシヤット』におけるこの箇所原詩は以下のとおり。
See Mystery to Mathematics fly!
In vain! they gaze, tum giddy, rave, and die.
- (8) 坪内逍遙「シヨニン」『早稲田文学』六九号(明治二十七年八月) 七七頁。